

クリスマスを前にしてこう言った人がいます。「私は、時々、クリスマスになると、とても悲しい気持ちになります。主イエスを身ごもることに大きな不安を覚える中、信仰の決断をして歩み出した母マリヤ。しかし、その先イエスさまは十字架の上で死んで行かれる。まるでイエスさまは苦しみ、死ぬためにお生まれになったのではと思えてくる。そんな予感を持ちながらわが子を抱いていた母マリヤの心はどんなであったらと思うと悲しい思いがするのです。」この人が話したのは、シメオンがマリヤに語った言葉のことです。聖書にこうあります。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。」ルカ 2:34-35 シメオンは主イエスと母マリヤの苦しみを預言したのです。それは、生まれたばかりの赤ちゃんにとってなんと不吉な言葉だったことでしょう。

きょうの箇所にはベツレヘムの町にイエス様が生まれたときのことが書かれていますが、ここにも、救い主が締め出され、遠ざけられたことが書かれています。この段落の最後の言葉、「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」ルカ 2:7 がそうです。最近、この宿屋はもとの言葉は客間であること。またベツレヘムは大きな観光都市ではなかったのも宿屋は数件程度だったことを考えるとむしろヨセフの親戚がいて、そこの客間、居間のことを言っているという説も出ています。それなら親戚もまた冷たかったわけです。これもまた辛いものです。そしてこともあろうに、神の御子は、臭くて暗い家畜小屋で生まれたのです。主イエスは、その誕生のときから、疎外され、人間扱いさえされなかったのです。

「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」これは悲しい言葉です。ヨハネはこの言葉をこう言い換えました。「この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」ヨハネ 1:10-11 聖書が言う「世」とは、神を締め出し、神に逆らっている人間社会のことを言います。もともと、人々は、自分では「神を締め出し、神に逆らっている」とは思っていない。宗教的なものがかなり希薄になった現代ですが、それでも、人々はまだ、それぞれの宗教の教えを尊重し、何かしら「靈的」なものを求めています。そして確認もせずさまざなな教えややり方をいとも簡単に受け入れ、靈能者を受け入れるのです。もちろん、本当に信じるというよりは良いことが一つでも起こるならそれやっとかとショッピングのような気持ちなのでしょう。そしてまことの神が送ってくださったまことの救い主を決して受け入れようとはしないのです。クリスマスに「聖しこの夜」と歌っていても、その人の心に、生活に、人生に、救い主を迎える「部屋」がないのです。

母マリヤが抱いた悲しみは、わが子の将来についての不安というだけでなく、神の御子が受ける苦しみに対する聖なる悲しみであったと思います。母マリヤがイエスとともに苦しんだ悲しみは、他のどの弟子よりも深かったことでしょう。しかし、その悲しみは復活の朝、喜びに変わりました。十字架のとき、イエスの弟子たちは、徹底して自分たちの無力を感じました。しかし、ペンテコステの日、その無力は大きな力に変えられました。聖書は、喜びの中に悲しみがあり、悲しみの中に喜びがある。力の中に弱さがあり、弱さの中に力があると教えています。それは、一見矛盾しているよう見えますが、この「矛盾」と見えることの中に真理があります。それは、聖書が語る「神の愛」についても同じです。

神の愛について、最も代表的な聖句は、なんとといっても、ヨハネ 3:16 でしょう。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」この聖句にも矛盾が見られます。それは、「神が…世を愛された」ということです。聖書が言う「世」とは、神を締め出し、神に逆らう人間社会です。救い主を家畜小屋に

追いやったわれわれです。そして聖書は、信仰者に、世と世のものを愛してはいけないと教えています。ヨハネ第一 2:15 に、こうあります。「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。」言葉はとても厳しく聞こえますが、特別な言葉ではありません。これが聖書の示す一つの基準です。聖書は、この点で決して妥協しません。信じる者を世から聖別された神は、信仰者に、世にあるものに執着し、この世と同じようになるのではなく、神の形、また、キリストの姿に似たものに変えられるよう求めておられます。しかしヨハネ 3:16 は「神は世を愛した」と言っています。信仰者には「愛してはいけない」と言われた世を、神は愛したということです。その意味は、世そのものに染まりきってしまった私たちでさえ、神は愛してくださったということです。そして、神は、その愛を実行し、私たちを救うため、ご自分のひとり子を世に「与えた」のです。「与える」という言葉には、普通に「与える」という意味の他に、「贈る」、「譲る」、「捧げる」などという意味もあります。「神はそのひとり子を与えた」という場合、そこには「放棄する」、「諦める」という意味が含まれています。今日、この後聖餐式を持ちますがイエスは聖餐を定められたとき、弟子たちにパンを与えて、「これは、あなたがたのために与える、わたしのからだです」ルカ 22:19 と言われました。この与えるは少し余裕を残しながら与えるということではなく自分のものを何一つ主張せず、すべてを与えるということです。英語で言うなら give ではなく give up です。神は、最愛の御子を、世を愛するあまり、すべてを与えられ、御子もまた、御父の愛とご計画を知り、ご自分をすべてを与えつくされたのです。ですから御子が世に産まれたということ自体、神様の愛がすべてそこに込められているのです。

この神の愛をあらわすために、2003年に、チェコのプラハで、「Bridge」という題の短編映画が作られました。そこには父ひとり、子ひとりの親子が登場します。以前、イブ礼拝で上映したことがあります。1937年にアメリカであった実話をもとに作られたということです。今日は礼拝の中で上映したいと思います。

(短編映画「ブリッジ」上映

父親は、橋を降ろしました。息子を犠牲にして大勢の乗客を救いました。神もまた、橋を降ろされました。ひとり子イエス・キリストを犠牲にしてこの世を救ってくださったのです。イエス・キリストは私たちが神に立ち返るための、神と人との文字通りの「架け橋」、ブリッジになってくださいました。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」神は、私たちへの愛のゆえに、御子を与えるという決断をされました。

最後にこの父親が子供を抱いた女性と会った時にそのことを喜ぶシーンがあります。自分の子供が犠牲になっているのにこの女性がわが子と会っているのを喜べるなんて私たちには決して出来ないことです。私なんか逆にこの女性を恨み、激怒すると思います。しかし、聖書は神は御子イエス・キリストの十字架の死を見て、満足されたと言います。それほどまでに私たちを愛して下さっているということです。このクリスマスの時、私たちの救いのために愛する御子をこの世に与える愛の決断を神様はしてくださいました。この神の愛の決断に、私たちはどのように答えたら良いのでしょうか？すでにクリスチャンの方にとっては自分自身の生涯をかけて主イエスに感謝し従ってゆくということではないのでしょうか。まだイエス・キリストを信じていない方にとって、今日、主イエス・キリストを自分の救い主として受け入れ信じるという決断をされるようにおすすめいたします。ぜひ、良い話を聞いたで終わらせないでいただきたいと願います。

